

# 第十三回 新城薪能

とき 平成十四年八月十七日(土)  
午後五時三十分始  
ところ 新城文化会館大ホール  
入場無料

能組

5時30分

連吟 半部 今泉英三 牧野修

太田研司 鈴木崇史 土肥耕一郎 竹内省吾 加藤貢 竹内三郎 清水利高 太田康弘 森田收 中嶋康夫

6時頃

火入式

仕舞 国栖 田村 田村 紅葉狩 今泉尚美 松尾明海 中嶋瞳 今泉友美

新城市議会議長 藤原眞治  
新城市教育長 小林芳春

連吟 大江山 小林寿枝 荒川享子

山本洋子 鈴木富代 土肥通子 杉山斐子 金山夏代 佐々木秀子 江見妙子 辻田育代 水谷麻朱 永田聡子 星野弘子 竹下京子 加藤佳子 今岡アイ子

ごあいさつ 新城市長 山本芳央

6時25分頃

狂言 末広かり

果報者 大原正巳 太郎冠者 天野雅夫

後見 畑中良雄

スッパ 酒井宏

舞囃子 雲雀山 中嶋 薫  
大鼓 清水利高  
小鼓 永田聡子  
笛 今泉英三

(休憩)

7時10分

狂言

花

折

新發意 水谷至男  
住持 小林常男

花見客  
加藤賢一  
山本勝一  
山口俊博  
小澤貞博  
山野泰三

後見 權田重紘

7時40分頃

能 黒塚

シテ 中嶋康夫

ワキ 竹内省吾

大鼓 清水利高  
小鼓 森田收

大鼓 鈴木崇史  
笛 酒井淑規

問 畑中良雄

ワキツレ 土肥耕一郎

後見 粟田康弘  
粟田明生

地謡 加藤貢  
竹内三郎  
牧野修司  
太田研司

今泉英三  
長島茂夫  
栗谷能夫  
栗谷浩之

附祝言

(終了予定八時四十分頃)

主催 新城市文化協会  
後援 新城市  
新城市教育委員会  
新城市観光協会

狂言 末広かり(すえひろがり)

果報者(シテ)が、正月に正客に贈る引出物として、末広がり(扇)を太郎冠者に命じて都に買いにいかせる。末広がりがどんな物か知らない太郎冠者が「末広がり買おう」と呼び歩いてみると、スツパ(詐欺師)につかまってしまふ。田舎者と見てとったスツパに言葉巧みにだまされて、から傘を買わされて帰って来ました。すっかり腹を立てた主人のご機嫌を直そうと、スツパに教わった離子物を、傘をさして、離し謡って見ると、主人も機嫌を直し共に『傘をさすなる春日山、これも神の誓いとて、人が傘をさすなら、我も傘をさそうよ』と浮かれ出し、主従仲良く離してまわります。

狂言 花折(はなおり)

寺の庭の桜が今年も満開になりました。いつも、花見客にあらされてしまふので、住持が今年には花見禁制と新發意(仏門に入つて間のない者)に言いつけて外出しませぬ。例年のように花見客が大勢訪れますが、新發意は言いつけどうりに中に入れませぬ。仕方なく花見客は垣の外から花を眺めて宴会を始めますが、今度は酒好きの新發意の方が我慢が出来なくなつて、とうとう花見客を寺の庭にいれ、舞えや謡えの酒盛りになつてしまふ。酔つた勢いでかえる花見客に桜の枝を与え、寝入つた所へ住持が帰つてきて事の次第がばれて追いこまれる。

能 黒塚(くろづか)

日も暮れた奥州安達原。やつてきたのは阿闍梨祐慶(あじやりゆうけい)の一行。諸国を行脚中の熊野の山伏たちです。野中かなたに見える小さな明かりを頼りに行きますと、それは一軒家。一夜の宿を乞いますと、現れた女は断ります。しかし、祐慶のたつての願いに、女はとうとう一行を招き入れるのでした。家の中で祐慶は、そこにおいてある袴輪(かせわ)(系車)を目にとめます。見慣れぬ物なので女に問いますと、それを使って糸を繰って見せます。繰りつつ女は、世の因果応報を語り、また、老いの早さを嘆きます。そして糸尽くしの歌を謡つて、人の身のはかなさ、長い命のつれなさをかこち、ふと糸繰りをやめて、泣き崩れるのでした。夜が更けます。冷えてもきました。女は、もてなしの火を焚くために山で薪を採つてくるといい、表に出て行くのです。つと立ち止まり、決して閨(わ)の中をのぞかぬようにと言っておくのでした。(中入)

女の言葉を不審がり閨をのぞこうとする能力(のうりき)(アイ)。しかし祐慶は許しません。やがて一行は寝入ります。すると一人起き出す能力。そつと閨をのぞきます。そして見たものは累々たる人の骸(むくろ)。腐臭ただよい、その物凄さに驚き倒れる能力。能力は驚きあわてて祐慶たちに知らせます。事を確かめ、一目散に逃げ出す一行。閨をのぞかれたと知つた女は、約束を違えたことを難じ、恨み、鬼女と変じるのでした。火炎を背に放ち、雷鳴を轟かせ、鉄杖を振りかざして祐慶たちを追います。これを迎えて五大明王に必死に祈る祐慶。襲わんとする鬼女。双方の激しい攻防が、いつ果てるともなく続きます。しかし、ついに勝つのは祐慶。祈り伏せられた鬼女は凄まじい恨みの叫びを残し、夜嵐とともに消え去るのでした。

## 薪能（たきぎのう）

この名称は夜になって薪をたいて、それを照明がわりに演能するところから来た名称ではありません。もとは「薪の神事」などと称して新年に御薪を寺社に献進する儀式で、一種の春迎えの信仰行事でありました。それに伴って行われる猿楽が「薪の猿楽」でありました。奈良の「薪能」は奈良時代に起こった行事で、興福寺の修二会しゅにえに鎮守の社から東西金堂へ行法のために薪を積む儀式であり、その時翁式の聖者が薪を負うてまうことが芸能化しました。初めは寺に所属する呪師しゅしが司っていましたが、後、猿楽者が代行するようになりました。能楽が大成後は金春座が責任者となり、他の座も参勤していましたが、明治以降は中絶、戦後昭和二十一年復活、昭和二十五年京都薪能が平安神宮で催されて以来、各地で大衆野外能として流行するようになりました。

新城に於ては新城文化会館が完成したのを契機に、平成二年第一回新城薪能が新城市文化協会主催で催され大好評を得ました。富永神社の祭礼能とは別に、誰でも参加出来ることとなり、正に「能の里」を目指して参りたいと存じます。現在全国で二〇〇カ所程薪能が催されていますが、職分の先生方の演能がおおく、新城薪能は素人による演能であることが特徴であって、今後永い伝統を持つ祭礼能と共に、薪能を新しい伝統として守り発展させて参りたいと存じております。今後とも皆様方のご支援をお願い致します。

薪能の短歌・俳句を募集しております。あなたの作品を文化協会事務局へお寄せ下さい。

謡・仕舞・囃子（笛、小鼓、大鼓、太鼓）・狂言のお稽古をなさりたい方はお気軽に文化協会事務局へお申し込み下さい。それぞれの向きにお世話を致します。